

・ふるさとを 共に語ろう 世界の友と!

～新しい「ふるさと学」への挑戦ーソウル・高雄・メルボルン～

ふるさと学・web会議交流

河内長野市立川上学校

〒586-0043
大阪府河内長野市清見台4丁目18番1号

<http://www.kawachinagano.ed.jp/kawasho/>

1. 研究の背景

(1) 本校のふるさと学、地域の特長について

新教育基本法・学校教育法においては、ふるさとの伝統や文化を学ぶための学習を行うこととしている。河内長野市においても副教材「かわちながのものがたり」を編纂し5・6・中1年生で、ふるさと学を実施している。各小中学校では副教材をもとに地域的特性を生かしたカリキュラムを実施している。

本校の地域は、土着の風習や鬼住み伝説、弘法大師の逸話、楠正成で有名な観心寺や大阪府指定夕映えの紅葉で有名な延命寺などの文化財に恵まれている。この地域特長を生かし、文化財の紹介を観心寺延命寺や地域の協力を得て、「子ども解説員」としてふるさと学の実習を兼ねた教育活動を行っている。また、学校行事の中にも地域を体験する活動が各学年にあり、故郷を学ぶ教育環境が整っている学校である。

(2) 本校の児童の実態

学習環境に恵まれた児童は、学力という面については個々の力を伸ばしている。児童の、多くは、新興住宅地に在学し、地域の風習文化財のある地域に在学する児童は極めて少ない。学校が主体的に取り組みなければ地域の風習や文化財から離れてしまう環境でもある。このことは学力学習状況調査アンケート（表1）

からも伺うことができる。また、同調査における自己有用感やチャレンジ精神を表すポイントは全国平均から10から5ポイント低い値が出て

今住んでいる地域の行事に参加していますか。	本校	全国
当てはまる	18.8	36.9
どちらかといえば	41.7	30.0

いる。学力向上の問題よりも自己有用感や達成感

を高める教育的活動の中に取り入れ、学校・保護

者・地域が連携して高めていくという課題を持っている。

(表1)

(3) ICT機器などの活用の実態

ICT機器について全教室にネット環境及びプロジェクターが整備され普段の授業で活用が図られている。言語活動を活性化するためにも教材提示装置と児童用ホワイトボードを合わせた活用が進んでいる。ネット環境があるため海外の学校との交流は以前と比べ、はるかに取り組みやすい環境にある。EメールやWEB会議を利用すれば簡単に情報交換が出来る。さらにiPadやモバイルパソコンを利用することができればweb会議室を広げone to manの交流も可能である。

本校では昨年11月にテレビ会議を利用して韓国・台湾・豪州との4カ国音楽交流授業を経験している。交流

内容については、Eメールでの意見交換を常に行えており、大きなトラブルなく数年交流活動が行えている状況にある。

2. 研究の目的

「異胡馬北風に嘶く」馬ですら故郷は忘れがたいとの意。人として生まれ育つ所に、愛着を持つのは当然である。だが、日本の教育において過去に伝統や文化の学習を歪んだ愛国心へと繋げてしまった。その反省からか、戦後教育において、この分野の学習活動は十分ではなかった。そこで新教育基本法・学校教育法においては、「伝統や文化に関する教育の充実により、我が国や郷土の伝統や文化を受け止め、それを継承・発展させる」ための学習を行うこととしている。

では、我が国や郷土の伝統文化の学習だけに終始していいのだろうか。それでは戦前教育の復刻版になるのではないか。新しい教育基本法には「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と明確に書かれている。

ところが現在、日本で行われているこの学習の多くが他国との関わりを欠いた中で、実践されている。それでは「教育基本法」の本来の精神から離れてしまうのではないか。我が国の伝統・文化の学習から日本と郷土を愛する心を育む。さらに他国を尊重し世界の平和に貢献できる態度の育成へと繋げていく学習とともに行うことで、本当の目的が達成しているのではないかと考えた。

そこで研究課題をここに設定し、本校のこれまでの教育活動をより発展させ、新しい教育基本法の精神に沿う「ふるさと学」への挑戦を試みたのである。

3. 研究の方法

- (1) 故郷についての学習・体験活動を積極的に進めていく。
- (2) 授業の中に言語活動を取り入れ、図や表、写真で説明する活動を進める。
- (3) 学んだこと体験したことを海外交流校と英語・外国語活動の時間に web 会議システムを使って発表伝え合う活動を進める。
- (4) iPad やタブレットパソコンを活用し児童が直接交流する時間を確保・増加させる。
- (5) 自主公開研究発表会 (ICT-day) を行い、成果と課題について検証する。

4. 研究の内容・経過



(写真 1)

(1)の取り組みとして、本市では、ふるさと学を充実させるために副読本「かわちながのものがたり」を作成し学習を進めている。この教材を発展させ体験活動を行った。

(2)の取り組みとして、教科指導の中で、教材提示装置やホワイトボード(児童用)等を使い、自分の考えを絵や表、図を使って説明する機会を全学年で授業の中に取り入れ、授業改善に取り組んだ。

(3)(4)(5)の取り組みとして、交流内容は事前にEメールを通じて、計画を交換し合う。準備や内容に微妙にずれが生まれることを理解しつつ連絡に取り組み、前日までには必ず通信テストを行うことを基本として交流に当たった。ふるさと体験学習・web 交流について以下に記述する。

4月27日ふるさと学習。本校では、3年間続けて観心寺・延命寺での子ども解説員を行っている。この縁もあり、ふるさと歴史学習として、観心寺私院旧槇塚院を特別に開放いただき5・6年生での見学を実施した。河内長野市教育

委員会故郷文化課の協力を得て解説案内して頂いた。隆盛時の僧侶の私院が数多く存在していたことやその立派さに驚きを感じ、改めて故郷に伝わる文化財についてのほこりが育った。(写真1)

6月2日、4日23日、5年生と6年生全クラスが英語学習の一貫としてオーストラリア交流校と学校紹介地域紹介として web 会議交流を行う。(写真2)

学校の栽培作物、動物、周りの自然や地域の有名人(楠正成)を簡単な英語と通訳NETを介し紹介した。ボルクストーン・セントポール小学校からは、自分たちになじみのあるお菓子や学校にある湖の話が紹介された。お互いの学校や地域を大切にしていることを知ることができた。オーストラリア校は交流時間が30分以内で英語と日本語の学習時間を持つという条件をつくり、クイズやジャンケンタイムなどお互い楽しい時間を共有することができた。1 台の PC では、英語の体験時間が短いという課題があることが認識された。



(写真2)

6月2日6年2組が台湾高雄民族国民小学校と web 会議交流を行った。英語学習の時間を使い簡単な英語と絵や写真をパネルにし、上記の内容と同じ学校地域を紹介しあう交流を行った。台湾からも故郷の紹介がなされ、歌やクイズを交換し合った。(写真3)



(写真3)

6月26日6年1組が韓国ヤンピョン初等学校 web 会議交流を行った。英語学習の時間を使い地域学校紹介、音楽の交換を行った。事前協議の中でハングル通訳が準備されるということだったのでよりスムーズに行えた。(写真4)



(写真4)

8月11日・21日 日本では夏休みであるが、オーストラリア校の日本語学習交流の協力依頼を受け、放課後児童会で web 会議交流を実施する。

9月7日 2年生1クラスが外国語活動の一環として、オーストラリアと web 会議交流を体験する。

9月 5年生が、地域協力を兼ね川上祭太鼓の練習に入る。6年生から撥擲きを教えてもらい9月28日に全校児童に披露した。川上祭太鼓は、故郷に伝わっているものではなく川上小学校で古典に親しむ一貫として取り組んでいるものである。この川上祭太鼓は、地域くすのかホール祭りの際にも(11月14日(土))出演要請を受け、多くの地域の人にも視聴していただいた。5年の児童の達成感は非常に高まったと感じた。(写真5)



(写真5)

10月4日 児童会代表(2名)稚児相撲取材見学。(川上地区8村に伝わる伝統的行事)

10月22日 全学年で(旧村を中心とする)地域を散策する(川上ラリー:縦割り活動)

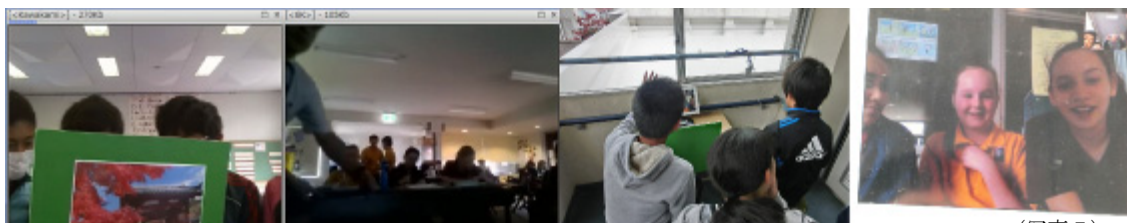
10月23日 5年生が韓国ヤンピョン初等学校とweb 会議交流を行った。川上ラリーの様子やけん玉、稚児相撲・川上祭太鼓などを披露紹介した。ヤンピョン初等学校からは、テコンドウ、韓国風オジャミ遊び、美しい民族衣装や正しい礼の仕方などが紹介された。韓国の小学校サッカーの優勝校であると聞いて子どもたちは非常に驚いていた。お互いのパフォーマンスを交換し楽しい交流の時間が終了した。などを紹介しあった。(写真6)



(写真6)

11月6日 河内長野市教委員会故郷文化課から講師をお呼びし、観心寺・延命寺の歴史、仏像等の歴史について学習する。当日使う写真資料等のデータをいただくことができた。

11月13日オーストラリア・セントポール校とweb 会議交流を行った。本校からは26日に行われる子ども解説員の場所観心寺についてプレゼンを行った。この会は、オーストラリア校の故郷紹介の時間を準備することができず日本からのプレゼンのみになってしまった。今回の交流では教室でオーストラリア校から日本語での質問、廊下で iPad を使い英語で故郷プレゼンも含めたweb 会議交流を行った。相手校の日本語教師の持ち時間が限られているので今回のようになることも想定内のことではあった。(写真7)



(写真7)

11月26日 6年生観心寺・延命寺に分かれ、河内長野市教育委員会、川上公民館、地域見守り隊、PTAなどの協力を得て「子ども解説員」をおこなう。当日5年生は、来年度に繋げるためにも見学参加する。観心寺6箇所、延命寺5箇所に分かれて実施した。モバイルパソコンを活用して3カ国に web 中継をおこなった。解説は少しの英語「This is Enmeiji gate.」フレーズを使い、後はパワーポイントと景色を配信した。通訳者を交えると長時間の交流になってしまうため一方的な配信という交流の形をとった。相手校の感想を聞く機会がなくなってしまった。後日メールや郵便で内容を送るという約束であるので、今回はこのような交流形態をとった。日本の景色を見ることができたと概ね好評であったとの先生の言葉であった。Web 会議の様子があまく録画できなかったとのトラブルはあったが、本校の子供たちの目標は達成できたと確信できた。(写真8)



(写真8)

12月1日 ICT-day とし「地域と繋がる学校、世界と繋がる教室—ふるさとを 共に語ろう 世界の友と!」をテーマに2時間目から6時間目まで合計5つの web 会議授業公開・ICT 活用授業を行った。河内長野市情報教育推進事業として、河内長野市市議会議員、河内長野市教育委員会教育長、大阪府南河内地区教員、保護者、地域住民が参観した。

授業①iPad3台、モバイルパソコン、PC を使った英語による web 会議交流。セントポール校2台、ボルクストン校2台・台湾高雄民族国民小学校に協力を得て5箇所にて児童が交代で異動し交流を行った。それぞれの iPad・PC は、日本語交流、英語交流が分けられての交流をおこなった。英語を使う場面を増やすことができた。ここでもふるさと紹介を簡単な英語で伝えた。(写真9)



セントポール校 ボルクストン校 高雄校 (写真9)

授業②四カ国音楽交流会ボルクストン校・台湾高雄民族国民小学校・韓国ヤンピョン初等学校とweb 会議室を使って交流する。各校8分の交流時間で、あいさつ(学校地域紹介)→パフォーマンス(歌)を基本に実施する。英語通訳を介しながらそれぞれの国柄を表す楽しい時間を過ごすことができました。本校からのあいさつで、地域で子ども解説員を行ったことを紹介しパフォーマンスとして「ふるさと」を熱唱した。(写真10)



川上小 高雄校 ボルクストン校 ヤンピョン校 (写真10)

授業③④4年生5年生が、web 会議室を使って JICA 遠隔授業に参加する。ペルー及びパラオより、現地で活躍する青年協力隊の人の話を聞く。本校だけでなく同じ中学校区に学ぶ三日市小学校の同学年が参加する。

授業⑤4年生がヤンピョン初等学校とともに web 会議室を使ってパナソニック遠隔乾電池教室に参加する。日韓の小学生がエネルギーの大切さを一緒に学ぶ機会となった。

公開授業が終わり、今回の授業成果を確かめるため研究の経過発表・パネルディスカッションを行った。故郷の伝統文化と ICT を効果的に活用した良い取り組みであるとの評価を頂いた。

3月4日 6年2組台湾と web 交流を行う。当初春節祭と年末やお正月についての交流を行う予定であったが、地震や春節祭の休みの影響で子どもたちの準備が出来なかったため徐先生が高雄市の様子についてクイズを交え伝えてくれた。川上小からは、除夜の鐘、おせち料理、お年玉、餅つき鏡餅などのことを実演、または、紙芝居やペープサート、写真で伝えることができた。(写真11)



(写真11)

5. 研究の成果

- ・地域を中心とする我が国の優れた文化を海外に伝えるための活動を行うことで、日本の良き文化・伝統をより深く確認することができた。地域や日本の文化伝統の発見ができた。
- ・他国の文化や伝統を web 会議交流で直接聞くこと教えてもらうことで他国の文化に興味や関心が持てた。
- ・効果的に伝えるためには絵や図、写真を効果的に使うことで、言語を補えることを感じる事ができた。英語がお互いの交流にとって必要なことが理解でき、学習意欲向上に効果があった。
- ・達成感を表すポイントが5年生で5P、6年生で2P、自己有用感を表すポイントが5年生で11P向上した。
- ・モバイル PC や iPad を複数台活用は、単純に児童の英語活動の時間を確実に増やした。効果はそれだけではなく、相手(2~3人)の顔を見つつ、伝わりの確認を行えたことに大きな意義がある。ICT環境整備が、進めば1対1の交流も可能である。コミュニケーション力の育成にも繋がる。
- ・交流計画を通して時間的に難しいことや準備についてタイトなものもあったが、情報を交換することでより親密な関係が作れることもわかった。本校のパフォーマンスを生かし交流計画を提案していけば継続協力が得られる関係ができた。
- ・今回の取り組みで多くの先生が、海外協力校と計画の段階から関わることができた。限られた先生同志の交流計画に終わらない素地ができた。
- ・新しい教育基本法の理念の、ふるさと繋がり、ふるさとを伝え伝えられることで互いの文化伝統を尊重し合えるきっかけとなったと感じられた。

6. 今後の課題・展望

本校の取り組みは、故郷の文化伝統を学んでいる、感じているということが前提となっている。本校でも故郷を体験する活動を今後とも続け、海外協力校と web 交流しながらふるさと学の目的を達成していきたい。また、海外交流校を持っていない学校であっても小中一貫教育の取り組みの中で、それぞれの学びの継続・共有を図っていく取り組みの中でも行う必要のあるものであると感じている。本校の故郷を学び伝える交流モデルを多くの学校に広め、本校も含めアクティブラーニングの実践中で更なる充実を図るため努力していきたい。

本校の取り組みは、ふるさと学の目的・国際理解教育の目的達成のひとつの方法であると考えている。本校の継続した取り組み、また、中・高への継続的な取り組みへのひとつのモデル提案・検証となるよう引き続き取り組んでいきたい。

7. おわりに

『傾蓋知己』という言葉がある。はじめて出会った者同士が、以前からの親友であったようにふるまう意味である。本校の web 会議を行い、ふるさとを共に語り合う取り組みに参加した児童は正にこのことを体感したと感じています。

日本中の小学校で行われているふるさと学や英語学習、ICT活用、アクティブラーニングの実践に本校の取り組みをモデルとして実践していただければ世界中にお互いの文化や伝統を大切に『傾蓋知己』の心が育つきっかけになると考えている。

まだまだ、準備段階でのコミュニケーション不足を反省するが、これも産みの楽しみと理解し、本校は来年もこの取り組みを継続していきます。新しいふるさと学に挑戦する機会を与えていただいたパナソニック教育財団様に感謝致します。

< 参考文献 >

「豊かな人間性を育む取り組み推進事業」児童生徒に関わる調査